

# 父親失格

presented by litoma

父が私たち家族の前で『鬱病宣言』したのは去年の9月頃のことだった。その年の4月に職場を移動していたのだが、そこでの仕事も上司ともうまくいかなかったことが直接の原因らしい。だがもう何年も前から重度の鬱病である弟（つまり私からすると叔父）の相談相手をしていた父は、自分もつられて精神が病んでいくのを以前から感じていたという。つまり時間の問題だったということだ。

翌月から父は無期限の休職に入った。私がどんなに早く帰宅しても父が家にいる生活というのは、最初のうちこそ奇妙だったものの2ヶ月もすると慣れた。寧ろ本当に居心地が悪いのは父のほうで、私はといえば、平日の真つ昼間に家にいる自分自身をどう思うのだから、逆に相手を心配する

余裕さえできていた。だが私は何もできなかった。声をかけることさえ。一度こんなことがあった。私が久々に早い時間に帰宅すると、居間で酔い潰れて寝ている父がいた。母が本人から聞いた話によると、その日の早朝に一人で登山に出かけた父は、麓の売店で相当量のビールを飲み、山道を転びながら帰ってきたという（実際に父の膝付近は泥で汚れていた）。この日以来父は飲酒禁止となったが、度々それを破り、その度に母は悲しい顔で父を叱った。

だが私はというと、そんな母とは対照的に父との接触を極力避けた。どう対応して良いかわからなかったというのが一番の理由だが、それ以前に「どうすることもできない」と心のどこかで諦めていた。社会の流れから弾かれた父は弱

い人間だったのかもしれない。だがその父に声すらかけてやれなかった私も、同じくらい弱い人間だった。だから最近になって父が私を叱責するとき「こんな俺が言えたことじゃないが」とか「こんな自分よりお前のほうが十分立派だが」なんて言葉を文頭に付ける癖に對し、私は「それは違う」と心の底から叫びたいのだ。

子は親を選べない。それはある意味不幸なことかもしれない。だが私は、経済的な状況でも我が子の将来を最優先で考えてくれる父を誇りに思うし、父が父で本当に良かったと思っっている。それは精神を病んだくらいでは変わらない。



今年の体育祭も野田キャンパスで行われた。残念ながら当日は雨で体育館での決行だったが、様々な競技が行われた。どれも盛り上がりつつあったが中でもカッブル競争は特に盛り上がりつつあった。前半、速さを競っていた競技者達も後半になると笑いを取ることに懸命になる。ポッキーをベアで咥えながら走るときに、男同士のカッブルの口と口が触れ合いそうになってしまった瞬間には、会場中がドツと

湧いた。昼休みには吹奏楽部と和太鼓の演奏が行われた。特に和太鼓の演奏では奏者がバチで太鼓を叩くたび空気が震えているのを感じた。独特の舞踏を交えた演奏は見ているだけで見るものの心を震わす。曲の合間に流れた笛による演奏は郷愁を感じさせる音色だった。

(P)

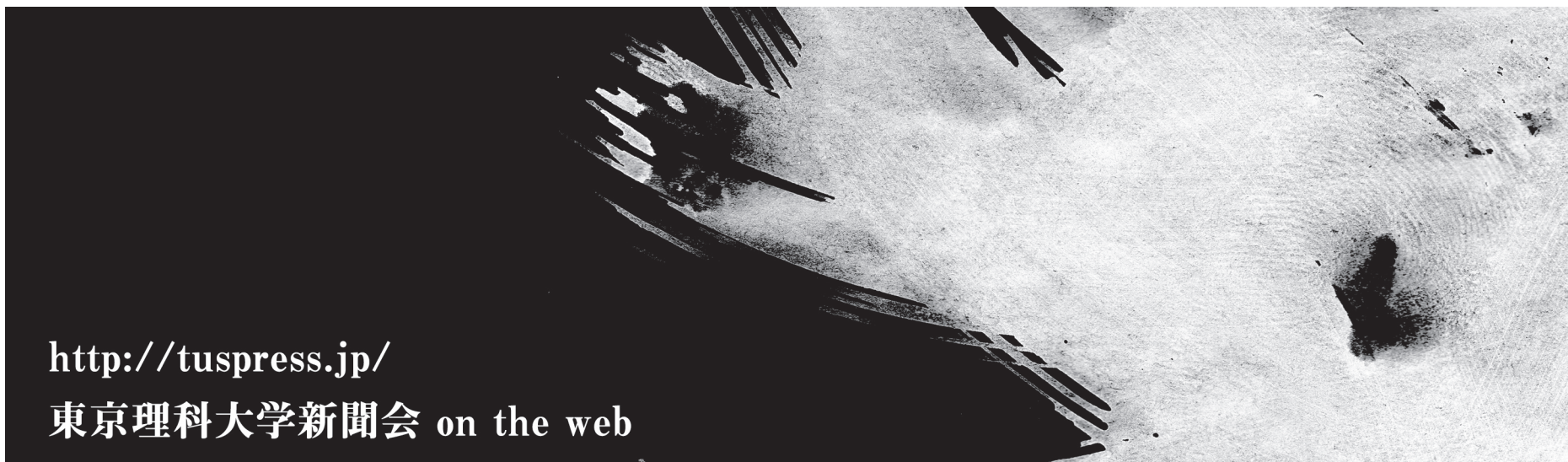
Blue  
Yellow  
Green  
Red

秋  
体育祭リポート

運動したのだ！



sport Festival photo-collection



<http://tuspress.jp/>

東京理科大学新聞会 on the web